

改革先導拠点ごとの具体的計画

※改革先導拠点ごとに作成してください。（つまり、最大で4拠点分作成すること。1拠点で複数類型に関して取り組む場合にも、拠点ごとに作成すること。）

「地域をフィールドにした探究学習」、「ICTを活用した多様な学び」、「生徒の学習ニーズに対応したインクルーシブな教育環境」を柱とし、全ての生徒が学びから取り残されることなく、地域と関わりながら成長できる教育モデルの構築を目指す。これらを体現すべく、令和10年度から「普通科」を「地域多様な学び科」（仮称）と改編する。「地域多様な学び科」はグラデュエーション・ポリシーに基づき下記2つの方針を打ち出す。これらの方針に従い、カリキュラム設計や外部講師の選定、外部連携を行うことで、地域に根ざしながらも中学生やその保護者にとって魅力的な学科の実現を目指す。

- ①激動する社会で、変化に向かっていける普遍的な人間力の育成：起業家やユニークなキャリアを歩む人材による講演・企画を充実させ、学力のみで自己を評価するのではなく、自分らしい将来像を主体的に描き、自己肯定感をもって進路を切り拓く力の育成を目指す。
- ②激動する社会の「今」に触れる機会提供：農業、保育、福祉等の重点分野において、最先端の取組や海外などを含む地域の外で活躍する人・事例に触れる機会を創出する。これにより、地域立地に対する制約を超えた教育を展開する。

1. 地域をフィールドにした探究学習

(1) 地域フィールド型学習

「課題探究」だけでなく共通科目や選択科目においても、①地域内での情報収集、②課題発見、③整理・分析、④課題解決策の立案、⑤地域での実行のサイクルを通し、生徒の資質及び能力の向上を図るとともに、地域の課題解決にもつなげる。展開としては、以下のような取組を計画している。

科目	取り扱うテーマ（例）
課題探究(教育・保育)	絵本の読み語りにより、地域での子育て環境の充実
課題探究(ものづくり・観光)	イチゴやハッサク等の地域の一次産品の加工販売
課題探究(防災・福祉)	運転免許を返納した高齢者等の交通弱者への支援
日本史探究	地域に多く所在する古墳と関連づけた古代史学習
体育	介護予防につなげるスポーツプログラムの普及
英語コミュニケーションⅠ	貴志駅を訪れる外国人観光客を対象とした観光コンテンツ開発

(2) 地域等への発信

探究学習の成果発表の場として、中庭・図書館・食堂を活用して地域住民に開放したイベント「貴志川高等学校フェスタ」を年間10回開催する。また、探究学習の成果をまとめた動画を作成し、正面玄関に設置するデジタルサイネージや地域の公共施設等で上映するほか、SNSを活用して積極的に発信する。そのほか、地元スーパー、図書館などに高校生の制作物を展示し、地域の中学校へ高校生が出張授業を実施し身近な選択肢として貴志川高校を認識してもらう。地域に向けて成果や情報を発信することで、貴志川高校生が学びの再確認や自己有用感・自己肯定感を高める機会となるだけでなく、地域から学び、その学びを地域に還元することを通して、将来地域を支えたいと思うきっかけを創出する。また、保護者への発信として地域の保護者ネットワーク（PTA やスポーツ少年団等）へ向けて在校生の保護者から発信を依頼し、卒業後の進路実績が可視化できるように卒業生のインタビュー記事や動画作成を行う。

(3) 推進体制

貴志川高等学校を拠点に、地域の小中学校、幼稚園、保育所、福祉施設、民間企業、市町村のほか、大学・高等教育機関等の関係者を結ぶ地域連携ネットワーク「Kishi-i-Net」を構築する。探究学習の共同実施はもとより、よりよい学校づく

り、地域づくりのための協働体として、定期的に会議を開催しながら活動を展開する。また、県内の産業界・自治体・高等教育機関・金融機関（産官学金）のネットワークであるわかやま地域連携推進プラットフォームとも連携し、外部専門人材を最大限に活用しつつ、社会の最新ニーズを反映した教育内容を提供する。教員負担軽減と授業の質担保のために、連携団体と学校をつなぎカリキュラム整理を行う探究コーディネーターを配置する。

2. ICT を活用した多様な学び

(1) 小規模校間遠隔授業ネットワークの構築

小規模校では、生徒の多様な進路希望に応えるための科目開講が制限されるという共通の課題を抱えている。本取組では、貴志川高等学校を拠点校とし、県立有田中央高等学校・県立伊都中央高等学校・県立海南高等学校大成校舎と4校の小規模校をICTで常時接続し、各学校の特色ある教育資源を相互に共有する「遠隔授業ネットワーク」を構築する。各学校内での集団学習の強みを最大限に生かしつつ、外部機関とも連携して、校内のリソースに縛られない教育活動を展開し、3年後の県内全域への拡大を目指す。

なお、貴志川高等学校からの一方向的な授業配信ではなく、協力校との双方向での遠隔授業を基本設計とする。展開としては、以下の内容を計画している。

科目名	配信校	内容
福祉「介護探究」	貴志川	配信校の最先端の実習室を活用した介護 DX の学習
家庭「保育基礎」	貴志川	配信校が蓄積してきたノウハウを活用した高度な保育の学習
農業「加工と流通」	有田中央	配信校の農業科教員による商品開発に関する学習
理科「生物基礎」	貴志川	配信校の栽培施設を活用した植物に関する学習

(2) 教育効果を高めるハイブリッド指導体制

遠隔授業の受信校は、配信校の専門的で質の高い授業を受信できるというメリットを享受できる一方で、対面授業と異なり双方向の学びには制約を受けるという課題がある。そこで、受信校教員が「伴走者（コーチ）」としての役割を担い、生徒の理解度モニタリング、質問のとりまとめ、学習意欲の維持支援に注力し、随時配信校にフィードバックを行うことで配信内容の充実につなげる。これらの取組を通じ、遠隔授業のノウハウを3年間で蓄積し、事業終了後の県内展開の基盤とする。

(3) 遠隔授業機材の整備

音声品質に特化した Neat 社製品を中核機材として採用する。拠点校（貴志川高等学校）には配信拠点を整備し、外部講師の授業配信も想定して整備する。具体的には、NeatBar（高性能マイクスピーカー）、NeatBoard（対話型ホワイトボード）、NeatCenter（カメラ制御）、NeatPad（タッチコントローラ）を組み合わせ、配信側と受信側が同時に発言しても音声のやりとりが成立するエコーキャンセリング環境を実現する。受信校には Neat 社推奨の持ち運びシステムを採用し、拠点校から貸し出す方式とする。

3. 生徒の学習ニーズに対応したインクルーシブな教育環境

(1) バーチャル空間での不登校支援

様々な事情により教室登校することができない生徒も、校外にしながら学校集団の一員であることを実感しつつ学習することができる体制を整備するため、クラスター株式会社と連携し、メタバース空間内に「和歌山メタバース高等学校」を構築し、校舎・教室・体育館等を仮想空間上に再現する。毎朝の SHR（ショートホームルーム）

や授業に参加することで、教室に入ることが難しい生徒でも、チャットやアバターを通じた動作を介することで、心理的なハードルを下げて教員や友人とコミュニケーションを図れるようにする。具体的には、メタバース上の座席に座ることで、教室で行われている一斉授業をリアルタイムで受講し、挙手ボタン等の機能を活用して教員の問いかけに反応することも可能とし、単なるオンライン授業視聴とは一線を画す「参加感」のある学びを実現する。今後、和歌山メタバース高等学校を他校にも広げていくことを目指し、本取組では貴志川高等学校の実践を通してメタバース空間の活用手法や授業運用のノウハウを蓄積する。

(2) スモールステップでの登校復帰アプローチ

「和歌山メタバース高等学校」を単なるオンライン授業の手段ではなく、登校復帰を支える段階的な導線と位置付ける。第1段階として、自宅からメタバース空間にログインし、普段の一斉授業や遠隔授業に参加する。聴講だけでなく ICT 機器を使用しグループディスカッション等にも参加できる。第2段階として、学校内に設置された「個別学習室」へ登校し「自分以外の誰かがいる空間」に慣れる。「個別学習室」にはバランスボールやヨガボール等を含む多様な椅子、パーテーション等を用意し、教室空間に心理的ハードルを抱える生徒でも安心して過ごせる環境を創出する。文化祭の展示発表やクラブ活動等をメタバース上で共同実施し、成功体験を共有することでリアルな学校生活に対する前向きな気持ちを高める。これらの段階を経て教室への復帰を支援する。「和歌山メタバース高等学校」にはオンラインとリアルハイブリッドで不登校の生徒へのサポートをする相談員を配置し、一人一人の実情を把握し、教員等と連携しながらきめ細やかなサポートを行う体制を構築する。また、小規模校ゆえに生徒間の関係が固定化され、人間関係に悩む生徒が多いという現状の課題を加味し、心理的安全な環境の創出に向けて社会性と情動の学習プログラムを導入する。

(3) AI 型教材による「オーダーメイドの学び」

学習面での遅れやつまずきは、不登校の生徒の登校復帰を妨げる主因の一つである。これらの問題を解消すべく、生徒一人一人の到達度に合わせた学習内容を自動提示できる AI 教材（すらら）を導入し、「和歌山メタバース高等学校」や個別学習室、自宅、後掲する公設民営塾等での自主学習に活用する。この教材では、学習者の習得状況や弱点を精密に分析し、基礎学力の学び直しからハイレベルな大学進学指導まで、個別に最適化されたカリキュラムを提供することができる。知識習得を AI が効率化することで、教員は生徒一人一人の学習計画を支え、困難に寄り添う「伴走者（コーチ）」の役割に専念する。

(4) デジタルサイネージの導入

発達上の特性により、校内情報へのアクセスに困難を抱える生徒に対してアクセス手段を拡充するため、各教室や廊下にタッチパネル式デジタルサイネージを設置する。欲しい情報へ直感的にアクセスできるユーザーインタフェースとし、学校行事、進路情報、地域をフィールドにした探究学習の成果報告等を常時表示する。また、前掲のとおり、来校者等に対する情報発信ツールとしても活用することができる。

(5) 高等支援学校開校を見据えたカリキュラム開発

貴志川高等学校敷地内には、令和 11 年度にキャリア教育に力点を置いた県立高等支援学校が併置開校予定であり、貴志川高等学校との間では、授業や課外活動を通して生徒間交流を日常的に促進する予定であるが、本事業にて採用するカリキュラム・マネージャーが、高等支援学校の生徒と相互に乗り入れ可能なカリキュラム開発にも取り組む。